ずいそう

郷土史に埋もれた秘匿基地

岩　本　英　司

自然豊かで移住者も多い福岡県の糸島半島。その一角に第2次世界大戦末期，海軍航空隊の基地があったことはあまり知られていないようです。半島の西端，船越地区に1945年8月の終戦まで約5カ月間存在した「玄界航空基地」の実態が明らかとなるのは平成になってからでした。この春まで赴任していた福岡で同基地のことを知って興味を持ち，跡地に2003年建立された記念碑に何度も訪れました。

静かな水面から水上偵察機が飛び立つ

玄界航空基地は，沖縄戦が目前に迫っていた時期に設立されました。本土決戦に備えてその存在が米軍にも気付かれない新たな秘匿基地が急務とされ，北部九州沿岸の静かな漁村が候補となりました。

基地の存在が長く知られてこなかった理由の一つに，航空機が飛び立つ滑走路を持たなかったことがあります。主力機は「瑞雲」。日産自動車系自動車部品メーカーの愛知機械工業の前身である愛知航空機が生産した水上偵察機です。フロートの付いた瑞雲が飛び立つには，滑走路に代わる水面が必要で，波穏やかな船越湾が選ばれたのです（**写真―1**）。

基地専用の施設も設けられることはありませんでした。地域の民間病院を本部とし，若い隊員らは民家や小学校などに寝泊まりしていました。滑走路も専用施設も持たなかった基地の痕跡は，隊員の食事をまかなった烹炊所跡などごくわずかしかありません。基地に関連した資料も終戦日の8月15日以降，全てが焼却処分されてしまいました。そのため海上自衛隊には同基地に関する資料や，瑞雲の戦闘記録なども残っていないそうです。

誤った認識が町史に記される

船越は戦時中，小富士村に属していました。戦後は志摩町を経て2010年に前原市，二丈町と合併して誕生する糸島市へと移行することになります。

合併前の志摩町で1972年に編さんされた町史に，わずか7行ながら同基地のことが紹介されましたが，そこには「海軍特別攻撃隊船越基地」と記されました。しかし玄界航空基地に編成されたのは，神風特別攻撃隊などで知られる「特攻」を拒否した航空隊でした。

基地を飛び立った瑞雲は，中継地点となった奄美大島の古仁屋基地で急降下爆撃用の爆弾を積んで燃料を補給し，沖縄方面へ出撃していきました。敵艦隊を攻撃した後は再び玄界航空基地に戻り，次の戦いに備えたといいます。

終戦に至るまで何度も飛び立って反復攻撃するという任務は，過酷なものであったことでしょう。実際，沖縄戦から帰還できなかった隊員も相当数いたようです。ただ明らかに特攻隊とは性格を異にしていました。基地に関連する資料や戦闘記録が残っていないことで誤解が生じ，町史にも誤って記載される混乱を招く結果になったと推察されます。

写真―1　波穏やかな船越湾

写真―2　志摩町に寄贈された「瑞雲飛翔」

玄界航空基地のことが明らかとなるのは，平成も半ばに差し掛かった頃でした。元隊員の梶山瑞雲氏（ペンネーム）による1冊の私記「瑞雲飛翔」が志摩町に寄贈されました（**写真―2**）。そのことをきっかけに地元町議ら有志が立ち上がって調査に乗り出し，全容解明に向けて隊員が分宿した民家の人たちや元隊員らから証言を集めることに奔走することになります。

調査の成果は，2003年10月発刊の「新修志摩町史」上巻に12ページを割いて記述されています。発刊に先立つ同年8月9日には，基地跡に建立された「海軍航空隊玄界基地之跡」記念碑の除幕式が挙行されました。隊員や海軍関係者，地域の関係者や賛同者ら150人ほどが参加したそうです。

長くベールに包まれ，昭和史の欠落とも言われた玄界航空基地。郷土史の1ページを刻む記念碑建立の有志メンバーは「戦後世代にとりましては，新たな歴史認識の出発点となりますならば幸いこれにすぐるものはございません」と除幕式の様子を伝えた記念冊子に綴っています。

戦火に散った人たちに思いをはせ

船越はJR筑肥線の加布里駅あたりから糸島半島方面に入って7キロほどの場所にある今も静かな漁村です。糸島の冬の風物詩「牡蠣小屋」のシーズンになると，県内外からやってくる多くの人たちでにぎわいます（**写真―3**）。その傍らにある記念碑は，大戦末期に秘匿基地がこの地にあったことを後世に伝え，平和な日本を築く尊い礎となった若き海鷲たちを鎮魂しています。

2020年1月から今年3月まで九州支社に勤務した筆者は，東京の自宅を離れて福岡市内で単身生活を送っていました。赴任期間はまるまるコロナ禍。仕事のない週末は密を避けながら福岡の自然にできるだけ触れようと，自転車で方々を訪ねて回っていました。福岡市のお隣で見所も多い糸島に足しげく通う中で玄界航空基地のことを知りました（**写真―4**）。

基地に関する多くのことは，企画展を開いたこともある糸島市の志摩歴史資料館で働くＩさんに教わりました。貴重な資料もいただき，その中の一つに読売新聞が2003年に地域版で5回にわたって掲載した連載記事「ドキュメント・玄界航空基地」があります。終戦とともに歴史の一ページから消えたこの基地の成り立ちや地域の人たちとどのように関わっていたかを伝える読み応えのある内容です。

国内には戦後の混乱の中で埋もれてしまった郷土史

写真―3　秋から春先まで牡蠣小屋でにぎわう

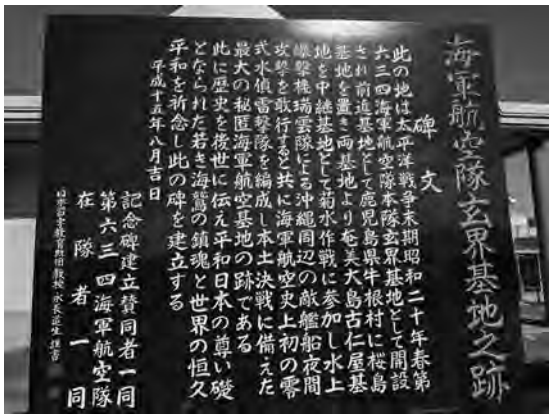
写真―4　基地跡の案内

も少なくないのではないでしょうか。人知れず戦火に散っていった多くの方たちに思いをはせる―。そのことを通じて，不安定な今の世界情勢をいかに乗り越えていくかを思考するきっかけになればと考え，糸島に存在した秘匿基地のことを紹介させていただきました。

以下，記念碑に刻まれた碑文をご覧いただきたく。

～「海軍航空隊玄界基地之跡」記念碑／碑文～

此の地は太平洋戦争末期昭和二十年春第六三四海軍



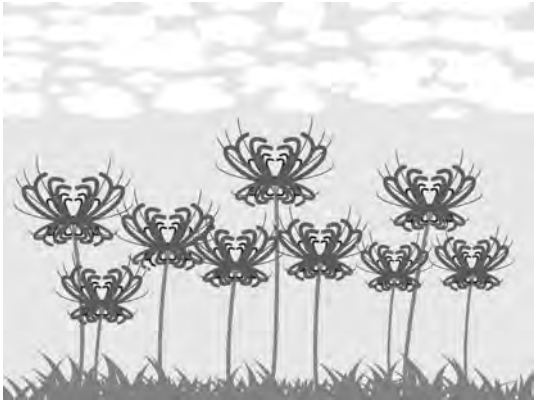
写真―5　基地跡に建立された記念碑

航空隊本隊玄界基地として開設され前進基地として鹿児島県牛根村に桜島基地を置き両基地より奄美大島古仁屋基地を中継基地として菊水作戦に参加し水上爆撃機瑞雲隊による沖縄周辺の敵艦船夜間攻撃を敢行すると共に海軍航空史上初の零式水偵雷撃隊を編成し本土決戦に備えた最大の秘匿海軍基地の跡である

此に歴史を後世に伝え平和日本の尊い礎となられた若き海鷲の鎮魂と世界の恒久平和を祈念し此の碑を建立する

平成十五年八月吉日

記念碑建立賛同者一同

第六三四海軍航空隊在隊者一同

――いわもと　えいじ　日刊建設工業新聞社企画・制作局企画部長――